



呼び込み係

2月1日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

2月1日のおはなし「呼び込み係」

「めっちゃ見てる」

「え？」

「めっちゃ見てるて」

「何がいな」

「ほら、あそこ」

「どこ」

「あの、いてるやん、ごっつ小さい」

「おう……ああ、あの、子泣き爺」

「こっ子泣き爺て！ あかん。うけてまうやん」

「似てるやんか」

「あかんで、笑かさんといてえな。あの人、めっちゃ見てるのに。うわ。来た！ こっち来た！

」

見世物小屋の前にいた小人は、おれたちに向かってよたよたと近づいてきた。体型のせいなのかどこか具合が悪いのか小人の歩き方は妙に不安定で、見ていて落ち着かない気分になってくる。よたよたというのが的確なのかどうかもわからない。ひょこひょこというのでもない、どたどたというほど重々しくもない。不規則に上体を揺らしながら、後ろに砂埃をたてるように地面をてってと蹴っている。

小人はおれの目をひたと見据えていたし、おれもそういうので負けるのは癪なので目をそらさず見返していた。メンチの切り合いだ。改めて「ああ、ほんまにめっちゃ見てるな、このおっさん」と思った。そういう顔つきなのだ。目をカッと見ひらき、びっくりしたような表情を浮かべていたが、それは別におれを見つけてびっくりしているからではなく、ただ地の顔がそういう顔つきなのだろう。

これまた小人だからなのかどうなのかわからないが、年齢不詳だ。若くはないことがわかるが、中年なのか老人なのか見当がつかない。そんな男がてってと地面を蹴りながらおれに向かって突き進んでくる。ツタコはいまさらになって別な方を見てごまかそうとしているが、ごまかせるわけがない。もうそこまで来た。背の高さはどのくらいだろう。おれの臍くらいだろうか。小人はおれの前に立つとびっくり顔のまま言った。

「タダシやんか。びっくりしたわ！」本当にびっくりしていたらしい。「何してんねん、こんなところで」

「あ。ドーマエのおっちゃん！」おれもびっくりした。「ドーマエのおっちゃんやんか！」

「彼女か？ え？ 彼女と韓国までコンゼンリョコウか？」

コンゼンリョコウというのが婚前旅行のことだとわかるまで時間がかかった。おっちゃん、いつの時代の言葉使こてんねん。

ドーマエのおっちゃんこと堂前のおっちゃんは、おれがほんとにまだ小さいころよく遊んでくれた近所のおじさんで、ちょっとした工夫でよく知っている遊びを破壊的に面白くしてくれるので、おれたち悪ガキたちのヒーローだった。何でもない鬼ごっこやかくれんぼが、堂前のおっちゃんと一緒にやると、チビリそうにスリル満点なことになるのだ。実際恐怖のあまりチビったこともある。とにかく遊びの天才だった。

「こんなところで立ち話も何やから、ちょっと入ってかへんか？」

堂前のおっちゃんは顔中をしわくちゃにして、これぞ「満面の笑み」という表情を浮かべておれたちを見世物小屋の中に誘った。

「いや、でも。中で話もでけへんやろ」

「ちゃうねんちゃうねん」おっちゃんがウィンクをした。ウィンク？「おれの部屋があんねん、この中に！！」

「ここに住んでんのかいな」おれはツタコを振り向いた。「ええか？ おれの知り合いやねん」
ツタコはこういう展開が嫌いじゃない。好奇心丸出しでうんうんとうなずく。
「おっしゃ、ほんなら2名様ごあんな〜い。ちゃうわ」
と言って、韓国語で何やら叫び直しながら中に入ってしまった。

縄のれんみたいに上からじゃらじゃらと垂れ下がるものをかき分けて中に入ると、異様に暗くて足がすくんだ。ツタコが手を伸ばしてきておれの腕をしっかりとつかんだ。右手前方がうっすら明るいのでそっちに一步踏み出すと、左下の方から堂前のおっちゃんの声が聞こえた。

「ちゃうちゃう。そっちはステージやで」
「あ、そうなん」おれは何だか間抜けな返事をしてしまった。「ステージって何やの？」
「『鰻姉妹』や」
「ウナギシマイ」
「ごっつ身体の柔らかい二人のねーちゃんがぬるぬるの」それからふっと口をつぐんでおっちゃんは含み笑いだした。「いや、これはカップルで見るもんやないで」
「何やねんな」

不意に明かりがついて、おれたちは天井の低い小部屋の中にいた。部屋には天井に頭のつきそうなごつい大男が4人もいて、みんなピストルを持っていた。
「ごめんなタダシ」堂前のおっちゃんは昔を懐かしむような微笑みを浮かべて言った。「恨まんといてや」
「へ？」
「おれがな、ここにいること知られると困んねん」
「お、おっちゃん、何を」
「おれも必死なんや」堂前のおっちゃんは寂しそうな顔をした。「せやから堪忍な。諦めてや」
冗談やろう？と言いたかったが、4人の男たちの表情を見ればそこには冗談のかけらもなかった。ツタコが悲鳴を上げた。おれの足が震えた。

(「鰻姉妹」 ordered by たけちゃん-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

● [「SFPインデックス」](#)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

呼び込み係

<http://p.booklog.jp/book/43217>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43217>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43217>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.